失はねばならぬ理由はあるまい。山の所在とその山の名の解釋とは各々獨立した事項であつて、一方の誤れるが爲に他方をも誤れるものとしなければならぬ道理は無い。博士に依ると顔師古は「祁連山を卽ち天山となすが故に、祁連を卽ち天とする」のであると說かれたが、これは不幸にして自分の見解とは全くの逆であつて、自分は師古は祁連を天と解すればこそ祁連山を卽ち天山とするのだと說明すべきであると思ふ。然らば匈奴で天を祁連といふた證據はどこにあるかということにならうが、それは此の問題を扱ふ誰もが說くやうに、無論師古以前判然とした據は今日に於て知るを得ない。然しながらこの徵證が判然しないから師古の言信ずべからずとするならば、他の匈奴語の解釋に就いては如何にすべきであらうか。習鑿齒が「匈奴名妻作閼氏」というのも、別に彼以前確かな據があるのではないから信ずるに當らぬことにならうし、師古が匈奴語で辮髮の飾を比踈というとし、胡帶の鈎を犀毗というとするの類もすべて信じてはならぬことになるであらうが、自分はそういふ見解には同意することを躊躇する。要するに自分は顔師古の祁連を天と解したのには必ず相當の根據があつたもので‖曾て白鳥博士の引用[2]せられた如く、史記の李廣利傳に祁連天山とあるのが、同書匈奴傳にはたゞ天山とあるが、此の祁連天山というのは前後の關係上甘肅省の祁連山と及び新疆省の天山とを並べ稱したものとは思はれず、必ず天山を指したものと見なければならぬが如きも、師古の解釋を道理づける旁證の一つになるであろう‖單に當時の鮮卑語から思いついた架空の說として退くべきものとは考へ得ない。師古の註釋に對して此の如く博士とは全く異つた態度を以て臨む自分は、天と祆と祁連とを對比した曩日の論述を博士の批評を得たにも拘はらず、今も尙翻し得ないのを遺憾とはしない。

註① 例へば史學雜誌第十一編所載の白鳥博士の「烏孫に就いての考」中の論述の如き、Chavannes の Documents sur les